

発行:(財)日本フィルハーモニー交響楽団 〒166-0011 東京都杉並区梅里1-6-1 TEL 03-5378-6311 FAX 03-5378-6161

【宮城県南三陸町志津川の避難所で、日本フィルと仙台フィルが金管五重奏&木管五重奏コンサート。そして地元中学・高校の吹奏楽部生と合同演奏】

7月10~11日にかけて日本フィルの金管五重奏と、仙台フィルメンバー中心の木管五重奏が南三陸志津川町を訪れました。今回の訪問の目的は志津川中学と志津川高校の吹奏楽部との合同演奏です。「被災地に音楽を！」の運動のもう一つの目標が被災を受けながら東北で頑張るオーケストラ＝仙台フィルとの協力があります。今回は仙台フィルにも呼びかけ、共同の取り組みとなりました。金管五重奏のメンバーはトランペット客演首席奏者のオッタピアーノ・クリストーフォリ、副首席の星野究、ホルンの原川翔太郎(賛助)、トロンボーン首席の藤原功次郎、チューバの西口学(賛助)。木管五重奏は仙台フィルのフルート芦澤暁男さん、オーボエ西沢澄博さん、クラリネットは日本フィルの芳賀史徳(宮城県出身)、ファゴット水野一英さんが参加しました。

志津川の高台にある中学校、高校は被災を免れ被災当初から町民の避難所となっています。体育館の中は冷房もなく、蒸し風呂状態。この環境で「暮らしている方々」の苦境はいかばかりかと想像します。リハーサルに先立ち中学校顧問の及川先生は、「3/11当日、生徒たちは下校前で、目の前で街が流されるのを目撃しました。その後1週間から2週間、電気も水もない不安と恐怖のなか父兄の迎えを待って学校で待機しました。親や親せきをなくした部員、やむなく転校した部員、さまざまな変化のなかでも吹奏楽コンクールに出ようという目標をもって、部活動に取り組んできました。音楽に集中している時、それは生徒たちにとってみんなで励ましあっている、と実感できる一番充実した時間でした。」と述べました。

高校、中学のそれぞれの部員との合同練習は約1時間、指導の先生はパートごとの指導に時間をとり、オーケストラメンバーとの幸運な出会いを重視しました。9人のメンバーの加わった演奏は見事な出来栄でした。日本フィルに来て2年、3/11の地震を経験した24歳のオッターにとって、今回の訪問は本人からの強い希望で実現しました。日本人とは違った視点から、率直な感想も含めレポートにし寄せてくれました。

〈ここに希望の光がある — オッタピアーノ・クリストーフォリのレポート〉



日本フィルより、東日本大震災の被災地である宮城地方にて、今回、僕たちが行った、チャリティーミニコンサートの印象を書いて欲しいと頼まれた。これは、ちょうど震災の4ヵ月後にあたる7月10日・11日の二日間にわたって、僕たちが南三陸という町を訪問したものだ。10日の朝、東京を出発、東北新幹線で仙台へ。そこから車で志津川高校へ向かう。到着後、金管、木管それぞれのアンサンブルのリハーサル、続いて、学校の生徒たちのバンドとの合同リハーサル。そして、コンサートをを行い、その日のうちに東京へ戻る。

今回のアウトリーチは、一見、通常の、これまでに何度もやってきたものと同様のプロジェクトのようでもあったが、でも、違った。僕たちは大きな悲劇の中心地に向かっていた。それも、他人の悲劇ではなく、日本全体にとっての悲劇であり、日本にとって最悪の悲劇だった。

今回の目的地がどのような様子なのか、僕は正直よくわかっていなかったが、多くを尋ねることもしなかった。ただ、僕らの宿泊は安全で大きな場所になること、そして、学校は普通どおりやっていて、生徒たちのブラスバンドも通常通りの練習を再開できているということだけ知っていた。

道中、僕の目は地震の爪あとを追っていた。もちろん、家や建物にその跡は多く残っていた。だが、どの建物もそもそも地震に対して万全の備えをしているのであろう、完全に崩れ落ちているようなものは全く無かった。もしかしたら骨組みや構造上の問題ですでに使えなくなっている建物もあったのかもかもしれないが、ただ、その外見からは、地震の際にその中にいた人々は、おそらく余裕を持って助けられただろうと思わせ、安堵を覚えた。屋根だけが壊れていたり、道がまだ崩れていたりする様子を見ても、日本の人々が長年、地震対策に努力してきたおかげで、多くの命が救われたことが感じられた。だが、その思いは、丘を下がっていくと完全に裏切られてしまった。

丘の下には、何の希望も残されていなかった(写真右)。この一帯ではどこにも逃げ場がなかったのだ。(次ページへ続く)

